

45 宝暦・天明期の文化(18世紀後半) + 化政文化(19世紀前半)

何より、経済が活気づいている時期に文化の華が開くという図式から考えても、元禄時代は好景気で文化の華が開く→正徳の政治・享保の改革で緊縮→田沼時代の好景気で文化発展→寛政の改革で緊縮財政・文化弾圧→大御所時代で好景気で文化発展→天保の改革で緊縮財政・文化弾圧となる。

国学の発達

「国学の四大人(しうし)」の順番がポイント。「春はカモノノリだね」

- (1) **荷田春満** …京の伏見稻荷神官の子。
- (2) **賀茂真淵** …「**国意考**」
- (3) **本居宣長** …漢意を排す「**古事記伝**」
- (4) **平田篤胤** …復古神道を唱える。信濃国の女性運動家**松尾多勢子**は難問。盲目の国学者**堀保己一** = 和学講談所と「**群書類従**」(古史料の索引集。現在に至るまでこれを越える本はないという)は頻出。平田篤胤 = **復古神道** は、地方へ広がっていき、幕末の尊王攘夷論にも影響を与え、現実の政治運動と結びついていった。

尊王論と幕政批判

尊王論。水戸藩では徳川光圀が、江戸の彰考館で『**大日本史**』の編纂を始めて以来、独特の尊王論が芽生えた。これを⇒**水戸学**という。混乱する人がいるが、水戸藩の藩学は⇒**弘道館**。やや難しいけど、藤田東湖の『弘道館記述義』があるでしょう。

宝暦事件と明和事件の区別をしっかりと。

宝暦事件 = 竹内式部が京都で尊皇論⇒追放刑

明和 事件 = 山県大式が幕府の腐敗に尊王斥覇⇒死刑

また、**山県大式**の『柳子新論』と会沢安の『新論』をかけた正誤問題もあった。

蘭学から洋学へ

幕府の研究機関は、「**蛮書和解御用**」→**蕃書調所**→洋書調所→開成所」の順番をおさえる。教科書では幕末の文化などと分けて記述してあるが、ここで覚えてしまおう。「蛮書和解御用は高橋景保の建議」、「蕃書調所はペリー来航の影響」も、あわせて知っておきたい。

私塾・教育の目玉は、大坂にあった二つの塾につきる。

- (1) 蘭学 = **適塾** (**緒方洪庵**) → 福沢諭吉・大村益次郎
- (2) 儒学など = **徳徳堂** (大坂の町人出資) → 富永仲基・山片蟠桃
吉田松陰の松下村塾は、幕末の志士を育てた。広瀬淡窓の**咸宜園**は早稲田で出た。漢字で書けることが大事。

人物と業績を一つ一つ覚えるしかない。

ニュートンの万有引力説などを紹介した**志筑忠雄**(「暦象新書」)は、ケンペルの「日本誌」を「鎖国論」と訳した人としても出題される。

正誤問題は、「**寛政暦**(高橋至時) ⇔ **貞享暦**(安井算哲・元禄文化)」。

「蘭学事始(杉田玄白) ⇔ 蘭学階梯(**大槻玄沢**)」。

なお大槻玄沢の私塾⇒**芝蘭堂**は、オランダ正月を行ったことでセンターテストでもでた。

批判的精神の高揚

人物と著者名だけでなく、その主張の内容まで最近では問われる。そこで、

- (1) **太宰春台** は荻生徂徠の弟子で、商業藩営論で『**経済録**』
- (2) **本多利明** は西洋諸国に学び、海外渡航や輸出の促進、国内開発などで経済力をつける必要を説いた『経世秘策』『西域物語』
- (3) **海保青陵** は商品経済の発展を積極的に肯定し藩営専売などによる藩財政の再建を主張した。主著は『**稽古談**』
- (4) 佐藤信淵は産業の国営や貿易の振興を説き、強固な中央集権体制や周辺諸地域を抱合した統一国家を構想するなど、体系的な危機打開策を展開した。
- (5) **安藤昌益** = 万人直耕の **自然世** = 『**自然真営道**』
というようにセットでおさえる。これは大変だけど、二宮尊徳の報徳仕法まできっちり覚える。幕末の開国論者 **佐久間象山** の「東洋道德、西洋芸術」も要チェック。



1 文学 (1) 小説

目玉は、寛政の改革と天保の改革で、それぞれ弾圧されたジャンルと作者と作品のセット。

寛政の改革⇒洒落本 = 山東京伝 儉約奨励時遊郭はないぜ 『仕懸文庫』	黄表紙 = 恋川春町 『金々先生栄華夢』
天保の改革⇒人情本 = 為永春水 『春色梅児誉美』	合巻 = 柳亭種彦 黄表紙束ねたもの 『修紫田舎源氏』

弾圧されなかったのが勧善懲悪の **読本**。

『雨月物語』 (**上田秋成**) 怪談のショートストーリー集
『南総里見八犬伝』 (**滝沢馬琴**)

滑稽本

『東海道中膝栗毛』 (**十返舎一九**) は弥次喜多道中。
『浮世風呂』 (**式亭三馬**) は、銭湯での会話集。

俳諧

与謝蕪村
小林一茶

川柳

柄井川柳と一問一答。



狂歌の **大田南畝** (**蜀山人**)

その他最近、鈴木牧之の『**北越雪譜**』がでる。

演劇

「東海道四谷怪談」(鶴屋南北)などがあつた歌舞伎が全盛を迎え、反対に、浄瑠璃が歌舞伎に圧倒されて衰退し、唄浄瑠璃に移っていった。なお、浄瑠璃の脚本家の竹田出雲と近松門左衛門(元禄文化)の正誤問題がたまにある。

美術

大きく分けて5つのジャンルがある。

(1) 1つめが浮世絵。鈴木春信が錦絵とよばれる多色刷りの浮世絵版画を創始。これにより浮世絵が安価で大量に作られるようになり普及することになった。ここで

注意。浮世絵版画そのものを始めたのは菱川師宣(元禄文化)。

区別すること。この錦絵の代表的作が、「美人画＝喜多川歌麿」

「役者絵＝東洲斎写楽」

「風景画→『富嶽三十六景』＝葛飾北斎・『東海道五十三次』

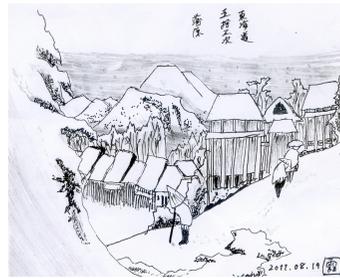
＝歌川広重」です。代表作は写真でも

判断できるように。

新課程の教科書で初出の絵も見逃さない。

世相や政治を批判する錦絵歌川国芳

の『朝比奈小人嶋遊』だ！



(2) 2つめの写生画は一問一答。

(3) 3つめが、意外によく出る文人画。文人画はよく(南画)と書かれています。これは文人画の別名が南画というわけではありません。

文人画とは渡辺華山の『鷹見泉石像』や池大雅・与謝蕪村(『十便十宜図』)など、画家を本職としていない、文筆業者が描いた絵のことです。そして、彼らが好んで用いた技法が中国の南画。ですから例えば「池大雅や与謝蕪村が描いた絵のことを何というか」と出題した場合、受験生が「文人画」と答えても「南画」と答えても、○になるという意味です。



4つめが西洋画。

平賀源内の『西洋婦人図』は写真もでる。

5つめが司馬江漢の銅版画です。

庶民教育・生活・信仰

全国各地に寺子屋読み書き、そろばんなど。教科書→『庭訓往来』など。

京都の石田梅岩が心学を唱える。

正直・儉約など生活倫理を平易に説く。著書『都鄙問答』

幕末に爆発的に流行った伊勢参詣を御蔭参りといい、これは主人の許可を得ていない抜け参りが多かった。また教派神道の教祖もあげておきましたが、出題頻度からいうと、天理教の中山みきが、一番でしょうか。

湯治や物見遊山の庶民の旅、三河の国学者菅江真澄の『菅江真澄遊覧記』もよく出る。

藩校・藩学

藩学は大名が建てた藩士の子弟のための学校であり、江戸時代を通じて280校が設立されている。古いものに岡山藩の花鳥教場(1641)がある。設立者熊沢蕃山は頻出。元禄のころから増え始め、米沢の興讓館や萩の明倫館などができ、寛政の改革後にまた増える。半分はこれ以後の設立である。

・初めは藩主が物好きで作っていたのが、途中からは富国強兵を図る人材育成の場となった。教える中身も初めは武術、漢学中心だったものが、後には蘭学、天文学、医学など実学も教えるようになってゆく。

＝日新館(会津)、興讓館(米沢)、明倫堂(尾張)、時習館(熊本)、弘道館(水戸)

・郷学は藩校まで遠いところに建てられた分校で、1668年に岡山城から30キロ離れたところに建てた閑谷学校が代表的。建物は現在も残り、国宝となっている。寺の本堂のような建物である。

寺子屋＝庶民教育

・化政文化を支えた教育機関としては寺子屋が重要である。江戸時代の日本人の識字率は高く、幕末に日本に来た外国人が、箆かき人足のようなものでも本を読んでいると驚いている。

教科書「庭訓往来」、「女大学」(女子)

・「庭訓往来」は室町時代からの伝統的な教材で手紙を材料にした教科書。このあたりを学ぶようになると寺子屋をきわめたことになった。

・女子は「女大学」を手本とし、一歩下がって暮らす女性の道徳を教わる。

私塾＝懐徳堂(大坂)、

寺子屋で飽き足らないと私塾に通う。懐徳堂は大坂町人の出資でできたもので、1724年に設立。146年間続いた。庶民が学び、その優等生は富永仲基、山片蟠桃である。

松下村塾(萩)

松下村塾は萩で吉田松陰が開いたもの。松陰はペリー来航時に密航しようとして捕まり、国元塾居になった。このときに作ったのが松下村塾である。高杉晋作、桂小五郎、伊藤博文、山県有朋はこの出身。8畳と10畳の2間に40人くらいが入ったという。これも一斉講義ではなく、一人一人と問答をするような授業で、日本の今後を考えさせるものだった。